

## 審査の結果の要旨

氏名 矢ヶ崎 将之

論文題目 : Essays on the Economic Analysis of Social Norms and Gender

( 社会規範とジェンダーの経済学的分析について )

審査結果 : 合格

審査内容

一昔前の経済学では自己の効用最大化を目的とする利己的行動を便宜上前提としてきたが、勿論自己の利益には反しても社会規範を尊重して行動する人々が多い。Akerlof Kranton (2000)は個人が属するカテゴリーの社会規範に沿った行動をゲーム論的にモデルし、職場での性差別、貧困と差別、夫婦間での家事分担などについて経済分析を行った。又、人々の社会規範に沿って行動しようとする傾向を利用して、省エネ (Alcott (2004))や寄付(Frey and Meier (2004))などの「好ましい」行動を、他の人がどうしているかを知らせる事で助長 ( nudge)する政策も提案されている。さらに、女性が、女性らしく行動しようとする為にリスク回避的に行動したり (Eckel and Grossman (2002 Evolution and Human Behavior)、競争的に行動する事を避けたりする結果 (Niederle and Vesterlund (2007 QJE))、労働市場などで不利な立場に置かれているのではないかと指摘されている。(Bursztyn et. al. (2017 AER))

矢ヶ崎氏の博士論文は社会規範に関するこれらの研究を発展させる3つの研究を行い、以下の5つの章からなる博士論文にまとめた。

Chapter 1: Introduction

Chapter 2: Pride, Shame and Social Comparison

Chapter 3: Competitiveness, Risk Attitudes, and the Gender Gap in Math Achievement

Chapter 4: Encouraging Women to Compete: Social Image and Prosocial Incentives

Chapter 5: Conclusion

第1章のIntroductionの後、第2章では社会規範に沿って行動する人々の選好を他の人々と自分との行動のずれから感じる「Pride」と「Shame」という概念を用いて公理的に明らかにし、社会規範に沿って行動する人々の効用関数はどのように表現されるかを示している。ここでの社会規範は他の人々の行動に関する情報として定式化されており、Akerlof and Kranton (2000)が分析対象としている「Identity」を巡る社会規範より簡明だが、効用関数の具体的且つ一意的な表現定理 ( 定理1と2 ) を矢ヶ崎氏は導出している。

第3章では女性のリスク回避的行動と競争を避ける行動が数学の習熟度レベルとどのように関わっているかをフィールド実験を使って実証している。実験は6つの中学校、生徒811人と保護者の協力を得て行われた。実験結果はリスク回避的行動は数学の習熟度を上げるのに役立っており、競争を避ける行動は習熟度を下げる事を示している。女性はより競争的に、よりリスクを冒すことにより現状改善の道が開けるという主張があるが、(Sandberg (2013 “Lean in: Women, Work, and the Will to Lead”))この結果は事態はより複雑である事を示している。即ち、女性らしく振舞う事で、リスク回避的であれば、数学の習熟度は上がるが、競争を避ける事で習熟度は下がるので、Sandberg氏の推奨するアプローチは必ずしも数学の習熟度を上げないと矢ヶ崎氏は指摘している。数学の習熟度にリスク回避的行動と競争を避ける行動がどのように関わっているかを実証的に示したのはこの論文が嚆矢となる。

尚第3章は慶應大学の中室牧子教授との共著である。

第4章では女性が競争を避けるという傾向が様々な社会的不利益に繋がっているという実証結果がある(Gneezy et. al. (2009 Econometrica), Booth and Nolen (2012 EJ), Buser et. al. (2014 QJE), Reuben et. al. (2015 NBER), Berge et. al. (2015, JEBO), Almas et. al. (2016 AER), Yagasaki and Nakamuro (2018 mimeo))事を踏まえ、本章ではどのような状況であれば女性が競争に積極的に参加するかを実験を用いて実証している。対象者は東京大学学生を中心に集められた男女181人(男性97人・女性91人)である。具体的にはこれまで指摘されていた女性の競争への参加を促す方策である、他の人たちから女性の競争への参加を隠す政策と女性優遇政策に加えて、競争参加への報酬が向社会的である場合を考慮している。実験の結果、従来の方策に比べて報酬が向社会的な場合は女性が競争参加を行い、結果は競争への参加を隠すかどうか依存しなかった。この結果は女性の競争への参加を促す具体的方策を示唆しており、学問的にも社会的に意義が大きい。

矢ヶ崎氏の3つの研究はどれも国際的なレベルの研究であり、審査委員全員一致で、本論文が博士論文にふさわしいとの結論に至った。

よって本論文は博士(経済学)の学位請求論文として合格と認められる。

令和2年 2月10日

審査委員 市村 英彦(主査)

Griffen Andrew Shields

加藤 晋

松島 斉

重岡 仁

